

令和 6 年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	18	学 校 名	静岡県立西部特別支援学校	校 長 名	鈴木 ゆかり
------	----	-------	--------------	-------	--------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
(1)	ア 事後も含めた緊急時の対応力向上	・避難生活も含めた系統的な防災学習を実施している。	AB 評価 99%	A	・災害時の具体的な場面に合わせた避難方法を学んだり、非常食体験を行ったりするなど、各学部で児童生徒の実態に応じた防災学習に取り組んだ。来年度も継続して取り組む。
		・災害時や緊急時に自ら考えて児童生徒の安全を守れる状態になっている。	AB 評価 92%	A	・緊急時に適切な対応を取ることができるよう、類型会等を使って訓練を行うことができた。今後は、類型ごと事例児をあげて緊急時の対応訓練に取り組み、緊急時に備えていく。
		・保護者・職員の防災意識が高まっている。	AB 評価 95.4%	A	・非常食体験等を通して災害時における医療的ケア物品の見直しができた。引き続き災害時における医療的ケア内容や物品を保護者や職員間で確認をし、災害時でも児童生徒の安全を守れるようにしていく。 ・171 を使った録音訓練実施率は、保護者 98.5%、職員は 100%であった。保護者と非常時の連絡方法を確認することで、防災意識が高まった。
	イ. すべての児童生徒が体調を整え、気持ちよく生活できるための取組の充実	・学校体制における人工呼吸器管理について理解し、安全に実施できている。	100%	A	・人工呼吸器管理は中学部 2 名が完全実施になった。引き続き小学部 2 名、中学部 1 名の学校体制による人工呼吸器管理も慎重に進めていく。来年度も新規の児童も含め職員間で連携しながら安全に実施していく。
		・個々の児童生徒に適した食と環境の提供及び摂食指導をしている。	AB 評価 96.8%	A	・食事環境や食事の提供等、安全に配慮することができた。今後も校内環境の衛生管理や安全性に配慮した取り組みを行う。 ・食事カードの作成、活用は定着してきた。さらに効果的に活用するために、記入内容の確認や呼びかけの時期を設定する。 ・摂食カンファレンスは複数での検討による情報共有や他機関との連携につながるケースがあった。 ・摂食研修では、初めて摂食指導をする教員への伝達に加え、全校として本校での食事指導に関する基本的

様式第3号

					な内容や支援の共有、確認もでき有効であった。
		・性教育全体計画を活用して性教育を行っている。	AB 評価 82.6%	B	・性教育全体計画を活用したと回答した教員の割合は約6割と低かった。来年度は掲示板や類型会等を使い、児童生徒の実態に合わせた性教育の内容を周知するなど、積極的な理解啓発を図っていく。
	ウ. 多様性を認め合い高い人権意識をもった児童生徒と教員	・児童生徒の人権意識が高まるような指導ができています。	100%	A	・人権教育年間指導計画を作成した。来年度は、統一された形式の指導計画を作成することで、さらに人権教育の指導を意識した授業を行っている。
		・教職員の人権意識が高まっている。	AB 評価 92.8%	A	・人権について学期ごとに自己評価を行った。また各学年、類型別に話し合いを実施し、全体では講師を招いた研修を行った。小集団で互いの気づきや考えを伝え合い、共有することで、教職員の人権意識が高まった。来年度は、効果的な掲示板の活用や肢体不自由教育における視点を取り入れた人権研修を行うことで、更に人権意識を高めていく。
(2)	ア 教育課程の組織的な検討と仕組みづくり	・目指す児童生徒像に迫る教育課程について考えている。	AB 評価 96%	A	・現状の課題の整理と解決方法に関する情報収集等、教育課程検討に必要な土台となる原理原則を整備、明確化することができた。また、学年主任、類型主任を軸として教員の気づきから各学部単位で教育課程の見直しに関する検討を行った。課題は、原理原則や各学部で編成し直した教育課程を実行する中で、教員一人一人が本プロジェクトの取組一つ一つのつながりを実感することである。
	イ 「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業づくり	・中心課題や各教科、双方の視点に基づいた授業づくりを行っている。	AB 評価 96.1%	A	・自立活動指導計画による分析的な中心課題抽出と、Lマップ(Ⅱ)やSスケール(Ⅲ・訪)の活用、各教科の段階と指導内容を明記した評価規準設定(ⅡⅢ)により、自立活動と各教科双方の視点に基づいた授業について考えることができた。また、I類型については、総合的な学習／探究の時間で働かせる各教科の見方・考え方の検討を行った。計画的に授業づくりデイを活用しながら、今年度以上に意識的に中心課題や各教科、双方の視点に基づいた授業実践を積み重ねて実践知へとつなげていく。

様式第3号

					・授業づくりの基となる個別の指導計画の内容を見直し、合わせた指導について、扱っている教科、段階を記入するようにした。今後は、各教科ごとの明確な目標立てや評価ができるよう検討していく。
		・授業づくりでは、個別最適な学びと協働的な学びが検討されている。	AB 評価 96.1%	A	・各類型での授業研究会や1グループ1授業公開での授業を主として、個別最適な学びと協働的な学びについて検討し、単元カードや指導案の内に位置付けることができた。また、それらの実践を基にした個別最適な学びと協働的な学びの本校としての考え方を仮説的にまとめることができた。協働的な学びについては、その本質を理解した上で授業実践へとつなげていく。 ・学習指導要領の教科・段階の視点から年間指導計画の見直しを行った。今後は、年計作成→授業→見直し→作成…を繰り返していくことで、教科ごとの指導内容や学年間、学部間の系統性等を整えていく。
	ウ 教員の専門性向上	・児童生徒や授業に関する話し合いの時間を設定し、日常的なOJLを実施している。 ・肢体不自由教育の専門性が向上している。	AB 評価 99%	A	・授業づくりデイを活用した授業検討によって日常的なOJLを実施することができた。各検討で重要な役割（タイムマネジメント面、合意形成面）となるファシリテーターの育成が課題である。
	エ キャリア教育の充実	・複数の視点で中心課題を設定し、指導場面を明確にして自立活動の指導を行っている。	AB 評価 97%	A	・新書式での自立活動指導計画の作成を通して、中心課題について意識したり、話し合いの効果を実感したりすることができた。課題として挙げがった話し合いの場の不足、実際の指導についての検証、作成時の不安や疑問について、来年度は授業づくり・ケース会デイを活用し、話し合いや検証を行っていく。

様式第3号

		・キャリア教育を意識し、社会生活を送る上で必要とされる力を身に付けるような指導をしている。	AB 評価 96.2%	A	・キャリアリーフレットを類型ごとに整理したことで、担当する児童生徒の身に付けたい力が明らかになった。今後は、キャリア教育で身に付けたことを次につなげるために、キャリアパスポートの充実に取り組む。
	オ ICTの 活用の充実	・個別最適な学びと協働的な学びのために、ICT を効果的に活用している。	AB 評価 96%	A	・視線入力装置を各学部に常設することにより、準備の手間が省け継続的な指導をすることができた。 ・ICT 活用の実践例を整理して、データベースを作成することができた。来年度は、スイッチ関係と端末をつなげるなど、ニーズに応じた整備や実践例の紹介に取り組み、更に活用度を高めていく。 ・協働的な学びのある授業を目指し、マッチングサイトを活用して遠隔合同授業のマッチングを試みたが、相手が決まらず、実施ができなかった。来年度は協働的な学びについて、その本質を理解した上で授業実践へとつなげていきたい。その方法の選択肢として、遠隔合同授業だけでなく、校内での合同授業、地域人材の活用等を検討していきたい。
(3)	ア 保護者や 地域、関係機 関との連携強 化と情報発信	・保護者が学校からの情報発信に概ね満足している。	AB 評価 94%	A	・保護者アンケートにて、学校からの情報発信に満足している保護者が9割以上であった。 ・学校公開には放課後等デイサービスや就学前施設の職員など33名の参加者があり、本校の教育を理解していただく機会となった。来年度は、行事と重ならない2学期実施とし、校内の準備体制を整え、より参加者のニーズに合った公開を目指す。 ・青藍祭に関する情報は、ホームページやInstagramを活用し、保護者や地域に向けてタイムリーに発信することができた。保護者の参加に加え、卒業生や放課後等デイサービスの職員の参加もあった。来年度はより多くの方に情報発信できるよう、地区の回覧板等も活用していく。

(3)		・ホームページ、SNS、作品展等を活用して、地域への情報発信に取り組んでいる。	AB 評価 98.2%	A	・ホームページの新システム移行に伴い、閲覧者が知りたい情報にアクセスしやすいよう、ホーム画面の構成を変更した。今後は、学部共通の行事はまとめてホームページに掲載するなど、内容の分かりやすさに努め、作成者の負担減にも取り組む。 ・進路に関する情報は、進路だよりの発行、COC00 による進路情報の提供を行った。今後も日々更新される福祉や進路に関する情報をよりタイムリーに発信していく。 ・地域向けの学校だよりは、計画通り年4回発行することができた。また、ホームページやCOC00にもアップし、情報を発信することができた。来年度も継続する。 ・教科部会「図工・美術」と連携して、各学部1回以上、校外の作品展に出展した。また新たな展示場所として、近隣施設・店舗6カ所をお願いし、作品展示を2回実施した。来年度も各学部の協力を得ながら、地域への情報発信に取り組む。
		・支援会議やケース会議をタイムリーに開き、組織的効果的な支援を行っている。	AB 評価 96.7%	A	・授業づくり・ケース会デイを生かして、必要に応じたメンバー構成で効果的にケース会を開くことができた。会議後の進捗状況や対応等について学年、類型で情報共有を確実にしながら次につなげていく。 ・進路相談会、移行支援会議など進路に関わる関係機関との会議を予定通りに進めることができた。高等部に進学しない場合の進路指導について、今年度行ったことをまとめ、次年度以降も利用できるようにする。
		・互いの理解が深まる交流・学習を行っている。	AB 評価 96.9%	A	・各学部、本校児童生徒と交流校、それぞれを知る有意義な交流活動ができた。更に互いの良さが発揮できる交流活動ができるよう、事前打ち合わせを丁寧に行い、実態に合った交流内容を工夫していく。
	イ 地域に根付いた学校づくり	・地域資源を活用した学習を行っている。	AB 評価 99%	A	・地域ボランティア登録者は17人のうち12人の方に来ていただき、読み聞かせ、楽器演奏、体育的活動で交流することができた。今後は、地域資源を活用した授業を計画しやすいよう、活用例等の情報提供を行っていく。

様式第3号

	ウ 創立60周年記念事業を通して、感謝と夢を語る指導の実践	・児童生徒が60周年の歩みへの感謝の気持ちと夢を語ることができる取組をしている。	AB 評価 95.2%	A	・キャラクターやスタンプラリー等のイベントを活用し、授業の中や休み時間に児童生徒が感謝の気持ちと夢を語ることができる取り組みを行うことができた。
(4)	ア 共に支え合い、働きがいのある職場づくり	・職場が発言や相談をしやすい雰囲気である。	AB 評価 89.3%	B	・小グループ内での相談等はしやすいと感じている職員がいる一方、学部や学校全体としては相談しにくい職場であると感じている職員もいる。日常的なOJL（職員間の対等な学び合い）の実施や複数メンター制度による相談体制を整える。 ・職員交流（2回実施）は、参加者にとっては交流を深める場となったが、参加者数が少なく学校全体の交流を深める場とするには至らなかった。今後は、教職員間のよりよいコミュニケーションの在り方を職員安全衛生委員会からも情報発信する。
	イ 学校運営課題の解決に向けた組織的な取組	・拡大運営委員会で得た情報を学校運営に生かしている。	AB 評価 95.2%	A	・組織マネジメント研修として、OJLや学校経営参画の基本的な姿勢や視点についての講義、演習等を行った。また、部・課・学年運営のマネジメントに関する課題の共有、OJLの視点による分析、アプローチ方法の検討を行った。次年度もOJLの研修を継続し、得た情報を基に実践した内容の評価、改善の共有も行うことで、学校運営に生かしていく。
	ウ 指導の充実に向けた業務の整理・精選	・授業準備や授業に関する話し合いの時間が確保できている。	AB 評価 93.3%	A	・NESパソコンのメモリを増設したことで、パソコンの動作が改善されて時短につながった。 ・スプレッドシートによる情報共有は、連絡事項をリアルタイムに共有でき、打ち合わせの時短や業務効率化につながった。
		・時間外等在校時間が月45時間以内になるようにタイムマネジメントをしている。	AB 評価 96.3%	A	・Googleチャットはスピーディーな情報共有をすることができ、分掌会での連絡事項が少なくなり時短につながった。今後は、校内でのルールを整えて、安全かつ効果的に利用し続けていくことが課題である。 ・分掌によっては削減できる業務が限られており、人員配置による業務負担が大きい面があった。今後も人員配置のバランスを学校全体で考えるとともに、課内での役割分担や協力体制を見直していく。